

懸命の努力を以て進んで來ました此の些々たる大樹にそゞ小  
雨の一滴に等しい私達の努力が、何時の日か？一葉一枝を育み  
得れば幸甚、私達の余りの微力を補ひ將來益々堅陣を築き本  
會が發展し祖山が榮昌する事を望んで止まない者であります。

最後に筆を新にして、會長現下を初め奉り、役員諸先生、其  
他各先生、本山當局等の懇切な御庇護と御指導に深甚謹謝し、  
併せて先輩諸賢、有縁各位及び會員諸兄の好意を盡しての御後  
援に對して満腔の謝意を表すものであります。

— 二、一、田中生欄筆 —

## 各部記事

### ◇庶務部

幹事 田 中 恵 巖

棲神第廿一號記載以後(昭和十一年一月以降)の主要事項を記  
す。

一月廿六日 劍道部寒稽古納會、多數の劍士出場盛大裡に終る。

二月一日 棲神第廿一號印刷製本完了す。

二月二日 運動部主催山梨靜岡縣下卓球個人選手權大會舉行。

同日 支院武井坊全燒す、學生活躍目醒しかりき。

二月三日 武井坊火災見舞を呈す。

二月七日 棲神第廿一號の頒布を終る。

二月十六日 聖祖降誕の佳日を迎へて、本會主催第一回書道展  
覽會並びに降誕及び學院創立記念茶話會、辯論部第三學期校  
内辯論大會等々開催、本年度掉尾を飾るに相應しく且つ盛大  
なりき。尙庶務部田邊幹事は降誕會及び學院創立記念日に關  
して次の如き聲明書を發表す。

年々歳々廻り去り廻り來ル此二月十六日デハアルガ、苟モ  
題目ヲ唱ヘル者ノ總テガ……別シテハ大聖止魂ノ靈山ニ行學  
スル吾等祖山學徒トシテ假初メニモ迂濶ニ過スベカラザル一  
月ナル事ハ言ヲ俟タザルトコロデアル。

△我々ノ良心、否吾人ノ信仰的情熱ハ使ヒ古サレタバレノ  
刃デハナイ。

△宗祖降誕ト學院ノ創立!!

吾等ニハ已ムニ已マレヌ嚴肅ナ反省ト抑ヘ難イ悦ビノ沸騰  
トガアル。即チ諸君ノ内ノ幾人カ今マデ最モ忠實ニ且ツ  
懸命ニ、ソレ等ニ就テ述ベタ。

△既ニ理窟ハ要ラナイ。タゞ先ヅ想ヒヲ貞應元年ノ昔ニ馳セ  
ヨ。無限ノ大洋ト無限ノ碧空、水平線上ニ上ル日輪、綺麗  
ナ入海ニ点々タル海人ノ家々、見事ナ常盤木ノ丘、ソシテ  
數々ノ奇瑞。

△世界ノ光ガ東方カラサシ初メタ、月ハ明淨ノ二字ニ盡キテ  
キタロウ。

△我々ノ濁ツタ魂ハ淨メラレ、汚レタ身体ガ甦ル日ダ。

△コ、ニコよなき聖日ト曰フ同ウシテ、學院創立ノ記念日ヲ持ツ我等ノ幸福コソ正ニ天下一品デアラネバナラヌ。

△學院ノ創立……。歴史的ニ之ヲ云ハゞ三八〇年前、弘治二年ノ西谷善學院開創ニ始マルガ、再往遠意的ニ之ヲ約言スレバ、實ニ宗祖降誕ト共ニ創ルト言フベキデアロウ。ソシテ未來永劫宗祖ノ魂魄ト共ニ在ルベキ祖山學院ナノダ。

△現今、宗門ノ教育機構ハ、恰モ武門政治下ニアツタ嘗テノ日本ノ如ク、時ノ然ラシムルトコロトハ云ヘ、明ラカニ大本ヲ忘レタ畸型的變態期ニ蠢メイテイル。明治維新ガ日本ノ國体ヲ取り戻シタヤウニ、淺間シクモ哀レナ我が祖山學院ヲシテ名實共ニ本化教學ノ根本道場タラシムベキ宗門ノ維新ノ必ズヤ來ルベキコトヲ待望シ、熱禱スルモノデアアル。

△コ、ニ吾人ノ希望ガアリ、精進ガアルノダ。  
△即チ吾等コソ今日ノ佳キ日ヲ迎ヘ送ルニ當リ、先ヅ祖師ノ降誕ヲ思ツテ、反省ト悦ビトニ色心ノ明淨ヲ得、更ニ學院ノ創立ヲ思ツテ明澄ヲ希望ト灼熱ノ精神トヲ得タノダ。ソシテ最後ニ、信仰ト開顯ト誓願ノ題目ヲ感謝ト自覺ト慈悲ヲ知ツタ魂ノ眞底カラ唱ヘテ合掌シヤウ。  
昭和十一年二月十六日

祖山學院同窓會

幹事 田邊生

二月十七日 書道展第二日、書道座談會を開催、斯道精進の上得る所甚大の効果を收めて會を閉づ。

二月廿七日 校舍新築問題に關する學生大會の決議に依り本會基金の據出を決定す。

三月十六日 昭和十年度第廿五回卒業式舉行、式後送別茶話會を催す。有爲の士を社會戦線に送る喜びの裡に袂別の悲しみを包みて感慨無量、閉會後記念撮影を行ふ。本年度卒業左の如し。

高等部廿九名

渡邊信覺	今井是觀	佐藤學善	鈴木智好
中村邦八	則武憲秀	横山是明	福田泰穰
高尾龍教	藤原是祥	森本正迪	端是信
麻生是聞	赤城義仁	大澤鍊勇	櫻榮鍊靜
長谷川寬慶	淺野詮勇	前花鍊章	小川龍聰
久住龍騰	紀本孝美	五水井榮誠	高野玄康
中里麗耀	青本孝勝	田中慈誠	望月義純

中等部十八名

宮本龍次	宇佐美鍊昌	香川是光	齋藤威邇
岡村正雄	齋藤順義	横山教持	長谷川泰温
吉田伊三	牛居行信	増田本精	芦田智幸
信田逕運	吉川海音	松岡堯雄	林賢要
望月半	窪田靜鑑		

三月廿三日 立正大學、學部及び専門部本年度卒業生三十五名登詣同夜歡迎會開催、草ヶ谷、四辻、岡村、各幹事幹旋す。

尙一行は廿五日迄在山、其の間可及的接待に努む。

四月十五日 昭和十一年度本會幹事候補者決定。

四月十六日 幹事選舉執行し結果左記の如く當選者決定す。

四月廿一日 昭和十年度同窓會決算報告書發表さる。

四月廿四日 昭和十一年度豫算案發表。

四月廿七日 第廿五回同窓會定期大會開催、午前九時半、田邊

幹事閉會を宣言し、田中惠春教授副會長代理の訓辭ありて、議長望月徳英教授、副議長林是幹教授着席され、直ちに各部經過報告をなして後昨年度末に於ける購買部問題に關する臨時動議あり、平岡幹事の該問題説明をなして「盜難物品は該部利益金より支辨する事」を提議、會員の賛意を求め、之を可決せり。

次に各部に對する質疑應答に入る。之も無風裡に終り、田邊幹事以下舊幹事辭任の挨拶ありて、全會員感謝と絶讃の叫びと拍手に送られ、更りて新たな者への希望と激勵に迎へられて田中新幹事の就任挨拶に次ぎ、昭和十一年度豫算案説明ありて討議に入るも風起らず安靜狀態を續けて進行し、建議案に來り監査員廢止可否（林君提出）の案出でたれど存置と可決。次いで緊急動議に入りて左の事項を議決す。

一、文學部細則（第一出版部第四條）に左の二項を附加する事。（田邊君提出）

第一項 本部ハ事務遂行上助手一名ヲ置ク

第二項 該部助手ハ新年度中等部五年級中ヨリ二名―四名

ヲ候補者ニ舉ゲ之ヲ選舉ス

一、本會々則第七條下第四項條文變更の件。

本會監査員ハ高等部二年生中ヨリ五名ヲ舉ゲ、但シ第一期ニ於テ高等部二、三年之ヲ選舉ス、庶務幹事ハ該職ヲ兼任スルモノトス

以上

續いて種々多様有益なる希望案あり、此に於て議事全く終了議長解任田中幹事閉會を宣して解散す、時に零時三十分。徒らに喧嘩時間を空費せし往年の弊見るべきもなく、僅か三時間余たゞ慎重なる態度を以て終始せる本年度大會に於て、望月名議長快刀亂麻の決裁それは少く措きて、舊幹事諸兄が眞摯なる會への努力は充分に認識する事を得、今後に於て全會員及び會員の名の下に會を代表する者は本會が持つ使命を熟考してそれを充分發揮せしむべきを痛感して止まない。此に舊幹事の芳名を掲げ、兄等が過去一ケ年間自己の一切を會に捧げて粉骨碎身の御奮闘によりてなされた多且つ大なる努力とその功績に讃辭を呈し深く感謝の意を示すものである。

庶務部 田邊正知君、辯論部 古川宣悅君、運動部 草ヶ

谷宣慶君、會計部 四辻宜有君、文學部 岡村正雄君、購

買部 平岡正學君

四月廿七日 午後幹事會開催、各部事務引繼ぎ完了。

四月廿八日 建宗の聖日を迎へ、今年度同窓會のトップを飾る新入生歡迎會開催、櫻花爛漫、時まさに春の最高潮に達し新舊生並に前途希望に輝く若人同志の固き握手は交はされた。

四月三十日 文學部、購買部助手候補發表。

五月一日 助手選舉を行ひ左の二君に決定す。

文學部助手 穗坂顯淳君

購買部助手 清水文要君

同日 本會監査員を發表す。

五月四日 各部長決定發表す。

幹事會開催、旅行候補地選定、他各部の活動開始を宣言す。

五月六、七、八日 釋尊降誕會に際し、道路布教を行ふ。(辯論部記事参照)

五月十三日 幹事會開催、春季旅行を東京、日光、鎌倉方面に

決定し、參拜部詰依田貞雄氏に實際の指導を受けて計畫書作

成す。

五月十五日 旅行許可願を學院當局に提出。

五月十六日 同許可願下る。

五月十七日 旅行計畫書發表と同時に各資緣家へ參加依頼狀發

送し極力募集に努む。

五月廿四日 關係各方面へ依頼狀發送。

五月廿六日 先輩山田本秀師入山せらるゝに際し、祝電を以て

賀詞を呈す。

五月廿七日 春季旅行中の中等部一、二年を主としての小旅行

コース計畫作成し發表す。

六月二日 春季修學旅行隊約四十名松木、武田兩教授引卒の下

に出發す。

六月三日 中等部一、二年小旅行を豫定の如く下部、毛無山に

向つて徒歩ハイキングをなす。引卒者、松田、林、岩田の三

先生並びに牛居、清水兩君附添ひをなす。

一日の清遊愉快なりしと聞く。引卒の諸先生並びに草ヶ谷君

の參加を得て特別の御配慮に預り、その勞を深謝す。

六月四日 立正中學生約八十名登詣す。牛居、清水兩幹事驛ま

で出迎へ、奥之院等案内をなす。同夕歡迎茶話會開催、中學

生らしく活潑且つ愉快の一夕を送る。

六月五日 立正中學生歸京。牛居、清水兩君見送りをなす。

六月六日 午後九時見聞を博め有益な土産を携へて前後五日間

の旅を終り旅行隊無事歸山。(旅行記事参照)

六月七日 本妙庵に於て、島智良師廿三回忌法要あり、庶務幹

事、墓前に香華を獻る、夜辯士派遣説教あり。

同日 旅行中特別の御配慮を受けし各方面へ御禮狀發送終

る。

六月八日 修學旅行決算報告發表。

六月十三日 春季校內雄辯大會開催(辯論部記事参照)

六月十四日 庭球大會開催(運動部記事参照)

六月二十日 身延山學會發會式舉行さる、高田惠忍師の御講演

あり學生聽講す。

六月廿九日 法苑學院、荒木師引卒の下に約廿名來山、田中、香

川幹事出迎へ、同夕武井坊に於て歡迎茶話會開催。

六月三十日 奥之院登山、香川英頂君案内す。同午刻歸途につ

く。  
七月廿七日 布教院開催中、清水龍山師、本會に金一封御惠與下さる。

八月廿四日 我等が院長猥下には今回宗門の輿望を御一身に收められて管長の要職に御當選遊ばさる、謹んで御祝詞を申上げたり。

八月廿六日 校友櫻井宏仙師御入山、祝電に托して慶祝す。

八月廿九日 岩田堯親先生新發田聯隊に豫備應召御入隊遊ばさる、田中、香川幹事驛までお送りす。

九月一日 午前九時より開校式舉行せらる。

九月七日 法主猥下管長御就任式のため御上京、學院師徒一同總門まで御見送り申し上げ。

九月八日 秋季雄辯大會準備の爲、辯論部幹事と同道甲府出張  
同日 購買部は同部創立十周年を迎へて景品附大賣出を催す。

九月十五日 法主猥下管長御就任第一回御歸山、學院師徒總門までお出迎へ申上ぐ。

同日 新宗務役員殿より金一封本會へ御寄附下さる。

九月廿三日 幹事會開催、第二學期各部諸事業の大綱を審議して活躍を期す。

九月廿四日 十月中各部分事の豫告を堂々發表す。

十月一日 勲額拜戴五週年記念法要全學生出仕、同日池上本門寺酒井大僧正本會へ金一封御惠與下さる。

尙同日法主猥下御親修の下に辯論部々旗樹立入魂式舉行、夜街頭に部旗を纏して獅子吼せり。(辯論部記事参照)

十月二日 名古屋圓頓寺住職平賀僧正御來山法要を督まる、學生一同出仕法味を献る、同僧正より金一封頂戴す。

十月十二日 宗祖御會式通夜説教奉仕(辯論部記事参照)

十月十三日 通夜説教奉仕者を招きて慰勞會を催す。

十月十六日 秋季聯合雄辯大會(於身延町公會堂)開催、部長並びに諸賢の御援助を仰ぎ、盛會裡に終了。(辯論部記事参照) 同夜参加校各辯士諸君を招き、歡迎慰勞の宴を開く、當日審査の諸先生及び特に御配慮を煩せし梅屋殿に甚深の感謝を捧ぐ。

十月十七日 甲府市制祭に際して市内各所に布教線を張りて益する所甚大なり。(辯論部記事参照)

十月十九日 先輩山田義順師御入山遊ばさる。謹んで御祝詞を電文に托す。

十一月一日 身中主催峽南競技大會開催せらる、本會運動部は身延町と合流目醒ましき活躍をなす。同日秋季庭球大會開催(運動部記事参照)

同日 立正商業五年生約六十名は小林、布施、兩先生に引卒されて卒業記念旅行に身延山登詣をなす、宇佐美、下邨兩幹事驛迄出迎へ、直に奥之院登山、下邨米村兩幹事案内す同夜歡迎茶話會開催、大いに茶目氣分を發揮し盛大裡に終る因みに同校は之が最初の身延登詣と承る。

十一月二日 本山に一泊、朝の勤經に參堂、午前九時歸京の途につく。田中、牛居兩幹事驛まで見送りをなす。

十一月四日 校友五水井榮誠兄御入山の日電報によせて祝意を表す。

十一月五日 先輩灘上惠教師今春渡滿活躍中の處、今回滿蒙僧を引卒されて御登山せらるゝに當り、午後一時より大客殿に於て、滿蒙僧身延登詣の感想、灘上師始め諸氏の滿蒙に於ける宗教情勢に付き御講演あり得る所多大なりき、後本會主催歓迎茶話會開催。

同日 教頭遠藤是妙先生御母堂御逝去遊ばざる、哀悼の意を表して田中、下邨、米村諸幹事、並びに學生代表數名と共に御通夜の法味を捧ぐ。

十一月六日 全幹事及び學生代表御葬儀に參列す。

十一月八日 校友望月義純兄御入山の日祝電を以つて賀意を述べ。

同日 幹事會開催、本年度入營の諸君に記念品贈呈の件と松田壽孝教授勤續十週年謝恩記念品贈呈の件を決定。

十一月十五日 縣下野球界の巨豪甲府商業俱樂部野球團本山參拜のため登延、我が野球部は好機會を逸せず古豪と相見えて一戦を交す、終始善戦して惜敗す。(運動部記事參照)

十一月十三日 遠藤教頭先生より御菓子料頂戴せり。  
十一月十八日 榮えある入營勇士歡送の辭を發表す。

### △歡送之辭▽

今年祖山は國家の干城として四君を臯軍に送る。

「立正安國」それはニチレニズムのスローガンであり、その達成は全生命を抛つて邁進すべきである。此使命を双肩に擔ふ聖日蓮が弟子我等が代表者を、

陛下の股肱とする誇と感激の裡に送る。西に波瀾を起し、東に不吉の烽火を見、内外共に風雲急なる時、正法樹立、護國の爲に正義の刀杖鋒槩も又可なり。同窓會は全學生の名を以て君等が重且大なる使命を全うすべく御奮闘を祈る、その誠意を表して左記の記念品を贈呈す。

一、銀 盃

高一 林 賢 要君(歩兵第七聯隊)

中二 安 田 泰 導君(歩兵第三聯隊)

一、置時計(特に本人の希望に依る)

中五 平 岡 正 學君(滿洲獨立守備隊)

一、軍 服(特に本人の希望に依る)

中三 佐々木 榮壽郎君(野重第三聯隊) 以上

十一月廿二、廿三日 映南軟式野球大會開催。我が野球部は輝く優勝旗を掲げて入場。善戦して堂々再制覇の榮を擔へり。(運動部記事參照)

十一月廿五日 本學院青年學校教練査閱案内狀を本會の名を以て各支院へ配付す。

十二月一日 入營者諸君へ記念品を贈呈す。

十二月十九日 第二學期終業式舉行せらる。式上本會副會長遠

藤教頭の手より滿十年御勤續せられたる松田壽孝先生へ記念品を贈呈。

一、大理石置時計 一個

松田先生感激措く能はず謝辭を述べられて、此の式を閉づ。

### ◇會計部

幹事 下邨顯淨

同窓會内に於ける會計部の存在は「縁の下の力持」に該當すると云つても敢て過言ではあるまい。

なぜならば本部は表面的に活動する性を有せず、専ら各部の華々しき活躍の原動力たる資財の蓄積融通機關であるからである。

而して本部の使命は嚴正、明確をモットーとして三部の會計を處理し、且つ各部の要求に對しては迅速に之に應じ、以て各部の性能を完全に發揮せしめる所に存在するのである。

斯様に重大使命を有する當該幹事なる故、吳下阿蒙の私の如きは到底其の器に非ずと固辭したが、四圍の趨勢上止むを得ず敢て非才を顧ずに就任受諾したのであつたが、本年度は幸にも各部長諸先生並幹事諸兄の御後援に預り、且つ會員諸兄が克く本部の會則を遵守して下されたので、今や悉く部業の大半を遂行する事を得て感激に堪えず、茲に衷心より感謝の意を表して止まないものである。

同窓會への寄附者芳名

一金壹封 池上玉 酒井大僧正祝下

一金拾圓也 立正大學長清水龍山先生

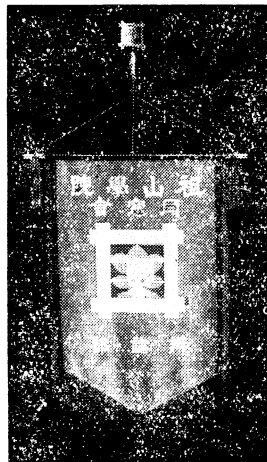
一金貳拾圓也 宗務院內總監並三部長殿

一金拾圓也 名古屋圓頓寺平賀僧正殿

「各部への寄附は各部に於て發表す」

### ◇辯論部

幹事 宇佐美鍊昌



人の世に尊きものは歴史であり、その追憶は感慨を生み今後への力となる。

我が祖山辯論部もその歴史を緝き、懐古する事は意義深き事と思ふ。其のかみ、學林創草以來の事は暫く置き、現存せる記事録のみに付て概示して見やう。今、當部に存する一番古い記事録は明治廿五年度のもので名稱して祖山鍊磨演說會となつてゐる。これに依ると、當時は盛んに討論會を行ひ壯氣を養ひ思想を鍊磨された。活潑な明治時代の青年學徒の貌、躍如たるも

のがある。例を抜記すれば

「吾邦現時之布教上、拆伏ト攝受ト何レカ利ナリヤ」

其の結果は、拆伏賛成者八名、攝受賛成者六名、中立三名で、拆伏主張の方が勝つてゐる。こんな風に盛んに討論會が催された様である。又「元且ハ祝スベキヤ否ヤ」なんて朗かなのもある。

感慨深い事は現柴田學監の名と演題が處々に載つてゐる事だ曰く「開化文明ノ説」等々。梅檀は双葉より薫しか。此の會の姉妹會として燈籠會が生まれ當時の最新文明器、幻灯寫眞で布教線上に躍つたのだ。時代は遷る。然し今は此の龍兒も破損したり磨滅して筐底に部寶となつて當時の雄飛を物語つてゐる。年頃になると現教頭遠藤先生や、下里執事殿、別院小松主任の三十名が各會に見え往時が偲ばれる。然し榮枯盛衰は世の習ひ當會も漸次沈滞に傾いたらしい。記事に曰く「本會一時不幸ノ境界ニ相遇シ殆ド中絶セムトス。於茲、吾人全感ノ士大ニ斯會ノ不振ヲ慨シ即チ往時ノ經歷ヲ想ヒ將來ノ時運ニ鑑ミ……乃至今般鍊磨會ヲ再興ス」とあり感慨見るべしだ。

四十一年では、今宗門布教の花と謳はれ、聖傳映畫説明に、レコードにその名を恣にした伊藤海開師が登壇してゐる。以下大正四年迄殆ど各鎮磨會毎に其の雄姿を見せてゐる。「繼續ハ力ナリ」の言葉が思はれる。大正年代に入つて、三四年頃になると講演部と改稱してゐる。部長は藤田文哲師である。現我が部長松木先生が颯爽と登場する。それから森亮遠師、藤田光肇師

等が。この所、祖山辯論の名トリオだ。耕辯會に、山門説教に道路布教に華々しい活躍が見られる。耕辯會の演題の如きも清新な氣を加へて曰く「理想ト主義」曰く「建設カ破壊カ」等々。七八年頃になると荒木師、結城師が盛に働かれ、十三年頃以下は武田、三木、矢谷、依田各先輩の奮闘がうなづける。最近は棲神誌上に詳報濟みだから省略する。大休殘存の記事を瞥見して得た過程が以上の如くである。御覽の通りほんの筋道を綴つたに過ぎぬ。こんな漫筆でなく的確な細密に亘つた祖山辯論部史が今後發表されむ事を切望する次第である。

次は今年の仕事を簡單に御報告する。

四月廿八日 前幹事古川兄より事務引繼完了。

五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

所、身延町各要所

辯士、高野、田中、諸君

五月七日 所、同。

辯士、松木部長、丸山布教師、安藤、葛原、丹羽、小崎、諸君。

五月八日 所、同。

辯士、丸山布教師、武田先生、片岡、丹羽、安藤、小崎、三好諸君。

五月十六日 東京實顯會二千名參詣の爲特別道路布教開演。

辯士、三木先輩、安藤、片岡、丹羽、小崎、諸君。

五月三十日 耕辯會開催。所、於釋迦堂



各辯士終了後松木部長の訓辭あり。曰く

(一)自己独自の辯説を確立すべし。

(二)ヂエスチユアーは自然であれ。禁亂用。

(三)歴史的記事は正確に研究せよ。

(四)數字は間違なく檢せよ。等々

六月十三日 學内各級選拔春季雄辯大會開催す。當日プログラ

ス左記の如し。

一、開會之辭

一、佛敎教育の必要性に就て

一、自ら燃えて聖火を點せん

一、若人よ立て

一、奮起せよ、日蓮主義者

一、躍進日本へ

一、弱き者よ、汝の名は

一、自己を再認識せよ

一、所 感

一、所 感

一、批評、訓辭

一、閉會の辭

幹 事	中一	小林是淳君
	中二	望月本修君
	中三	伊藤慈昭君
	中四	大森郁夫君
	中五	武智實靜君
	高一	齋藤威遵君
	高二	山田友篤君
	高三	安藤海長君
	高三	古川宣悅君
部長		松木先生
田中幹事		

六月十五、六、七日 開關會道路布敎

所、身延町各要所

十五日 辯士、葛原、片岡、加藤、諸君。

十六日 丸山本山執事殿、安藤、片岡、加藤、高野諸君。

十七日 丸山本山布敎師、田邊、小崎、高野、田中諸君。

八月七日 仁王門説敎出張。

八月十日 清正公祭禮出張。

八月十五日 深敬病院出張。

八月十七日 大善坊出張。

因みに覺林坊、山門、蓮乗坊、大善坊、本妙庵、深敬病院等

は中五以上當直割になし毎月出張す。

特に小崎、難波、大住、高野、田中諸兄の奮闘を謝す。

九月十二日 龍口法難會道路布敎開演。

所、身延町各要所。

辯士、丸山本山執事殿特別出講、高野、田中、諸兄。

十月一日 勅額拜戴五週年記念道路布敎開演。

所、身延町各要所。

演題、辯士左の如し。

童 話

正しい信の歩み

信仰生活の法悅

眞の常寂光土

日蓮上人と日本國

勅額拜戴五周年を迎へて

人間の目的

信の分野

齋藤威遵君

田中靜光君

加藤智學君

小崎靜雄君

難波智龍君

松岡堯雄君

片岡光乘君

高野敎督君

心の啓發

葛原榮靜君

十月一日 辯論部旗樹立式

柴田學監より特別の御芳志を得て、多年の宿望なりし辯論部旗を作製する事が出來た。我が部の前途燦たり矣。且法主親下御親修の光榮を得、堂々部旗入魂式舉行。全學生熱禱感激裡に式は完了。(前示寫眞參照)

十月十二日 宗祖鶴林會通夜説教(本山布教部合同) 丸山執事

松木先生、結城布教師、丸山布教師、小松師、片岡君、小崎君、難波君、宇佐美君。

十月十六日 秋季聯合雄辯大會開催。

參加校 立正大學、池上學林、光山學院(京都)、立正學院(大阪)、法苑學院(東京)

因みに本年は特に本山布教部及び山梨日日新聞社の後援を得た。詳細は身延教報誌上(十一月號)發表に付御覽を乞ふ。

審査員諸先生を左の如く御願ひ申し上げた。

審査長 柴田顛秀學監

松木本興先生

今村是龍先生

林 是幹先生

松田壽孝先生

プログラムは左の如し。

プログラム

一、開會の辭

◇優勝カップ返還式

一、審査員挨拶

一、宗教と罪惡

一、日蓮上人を憶ふ

一、我等の行く所

一、青年修養の目標

一、清流に梳る者

一、人生の曙をめざして

一、農村青年の使命

一、身延町の女性として

一、今正に是其時なり

一、未 定

一、使命の矢を放つ者

一、昭和進新途上にある吾等の使命

一、延獄に歛を振ふ我等の喜び

一、地に吼ゆる法華色讀の行者

一、佛教の精神的文化價値

一、太陽の如く

一、光りは祖廟より

一、能動主義の提唱

一、宗教デヤーナリズムの將來性

幹 事

本學教授 中條是明先生

本學院 永田壽昶君

本學院 梅津榮希君

本學院 佐々木順正君

身延青年 田中萬造君

女子青年 伊藤たき子嬢

本學院 佐野 殿君

豊岡青年 千頭和大二君

女子青年 志村八重子嬢

本學院 高野 教誓君

立正學院 井上 龍温君

池上學院 川井 厚道君

光山學院 丹羽 惠觀君

身延青年 小笠原清保君

法苑學院 増村 海良君

池上學院 大倉 玄雄君

本學院 齋藤 順義君

光山學院 田口 學泉君

本學院 小崎 龍雄君

立正專宗 釋 徳成君

一、牀座を捨て、何處へ行く 本學院 丹羽好文君

一、佛説の如き行者世に出現を望む 立大學部 田代貫徹君

一、使命と世相を考慮せば 本學院 片岡光乘君

一、絶對的指導原理への反省 番 外 田邊正知君

◇優勝カップ授與式

一、挨拶 榑 辯論部長 松木本興先生

一、閉會の辭 幹 事 田中惠嚴君

審査の結果校内優勝者高一齋藤順義君、校外優勝者立大專宗楠山恒康君と決定、やがて滿堂の聴衆の拍手に送られて肅々と兩君出場、部長殿から嚴肅裡に優勝カップは授與された。

尙ほ番外辯士として高三田邊正知兄最後に登壇、我等の言はむとする絶對的指導原理を大衆の眞只中に投げ與えて遺憾なし。

因みに當大會に際し御盡力下された本山布教部、山日新聞社審査員諸先生並に各參加辯士諸君に滿腔の謝意を呈します。尙ほ當大會のデコレーション其他終始犧牲の奉仕を下さつた梅屋旅館主人に厚く御禮申し上げます。

十月十七日 甲府市制祭に付、特別出張道路布教開演。

所 A、太田町公園内

B、常盤町五番地

統卒者 松木辯論部長

辯士 小崎龍雄、難波智龍諸君

高野教誓、宇佐美鍊昌諸君

十一月六日 立正大學主催全國各大學高專聯合雄辯大會に高三田邊正知君を派遣す。

演題 必要にして且充分なるもの

十一月廿八日 池上學院主催秋季聯合雄辯大會に左記の四君を派遣す。

演題

一、可能の世界 中一 永田壽昶君

一、笛は鳴る、いざ踊らん 中四 米村智淨君

一、暗雲を打はらつて 中五 下邨顯淨君

一、今正に之れ其の時なり 中五 高野教誓君

一、三つの廣告 宇佐美鍊昌君

第三學期分

一月廿三日 耕辯會開催

二月十六日 宗祖降誕會記念雄辯大會開催 以上

本年度當部寄附芳名左の如し。

一金一封 本山執事長 柴田 顕秀殿

一金十圓也 本山布教部殿

一金十圓也 山梨布教師會殿

一金一圓也 大阪妙像寺殿

一金三圓也 惠 善 坊殿

一金一圓也 矢谷 惠 隆殿

一金一圓也 蓮 乘 坊殿

一金二圓也  
松 司 軒殿  
一金二圓也  
玉屋 旅館殿  
一金一圓也  
十全堂醫院殿

右各位に對し厚く御禮申上げます。

### ◇運動部

幹事 香川 是光

本年度に於ける運動部各部記事次の如し。

#### ◆劍道部

十月四日 秋期大會を三木、松永、兩先輩並に部員約二十名出場のもとに開催す。

此の日松永氏より劍道獎勵として金一封を下さる。

戦蹟左の如し。

紅白戦 白軍勝

リーグ戦 一等出島、二等日野、三等中谷、四等安藤、五

等鈴木

優勝戦 一等出島、二等日野、三等林

十月卅一日 身中講堂に於て身中劍道部員と練習仕合をなす、

我が劍士よく奮戦し引分となる。

十一月二日 我が部員は身中講堂に於て身中部員と共に猛練習をなす。

本年度本部は小川、麻生等の劍士を送りしも中谷、出島、藤井福井、望月、林、鈴木、前田等以下多數の強豪を有し春四月に加藤、日野、中村等數名の新鋭を加へ堂々たる陣容を整へ

り、正月廿二日より小野五段を迎へて寒稽古をなし三十一日納會を開催し猛練習の後二月に身中部員に挑戦せんとの豫定なり。

#### ◆庭球部

六月十四日春季大會を林部長先生、松木先生出席のもとに開催す、成績次の如し。

紅白戦 白軍勝

クラス戦 一等 中二、二等 中三、三等 高一

原徳寮對本山軍の對抗戦は本山軍の大勝となる。

優勝戦

一等 松木先生、加藤組

二等 天ヶ瀬、青柳組

三等 草ヶ谷、香川組

十一月一日 秋季大會を開催す。

紅白戦 紅軍勝

クラス戦 一等 高三、二等 高二、三等 中一

優勝戦

一等 中村、望月組

二等 葛原、竹谷組

三等 林、太田組

遂に優勝旗は新進中村望月組に授與せらる。

庭球部は超特急小野兄の卒業によりて痛手をうけしも、葛原加藤、竹谷、望月等の精鋭によりて堅く守られ、特に松木、

望月(徳)、林雨先生が熱心に部員を勵まされたことは眞に感謝致します。

◆卓球部

十月四日 下部青年團主催卓球大會に本部より小友、藤、兩選手出場し奮戦をなし準々決勝にて山梨水晶B組を軽く破りしも、準決勝戦にてをしくも勝を逸せり。

十月十八日 校内大會を開催す。

紅白戦 白軍勝

優勝戦 一等 藤、二等 鈴木、三等 小友、増田、

十一月十五日身延中學校講堂に於て開催の山靜選手權大會に小友、鈴木、大森、藤、望月の五君出場し藤君よく戦ひ入賞す卓球部は豫算少なきにもかゝらず部員諸兄の熱心なる努力によりて能く對外的に進出出来たことを感謝す。

◆野球部

昨年度に於て宿望の峽南野球界制覇を達成した我野球部は本年度に入り益々その整備を進めて、内容外觀共に堂々たる威風を具ふるに至つた。選手の人格的陶冶と技術的科學的訓練、用具の充分なる供給等、精神的に肉體的に、將又、經濟的に多くの苦衷と犠牲とを克服してチームの補強工作に専念した主腦部の努力は文字通り献身的の熱意そのものと云はねばならぬ。即ち、監督として田邊正知君を、テクニカルマネジャーに草ヶ谷宣慶君を、ビジネスマネジャーとして永瀧幾順君を煩はし、主將山田友篤君、副將宮本龍次君等、錚々たるハリキリボーイズ

を擁して、その發展強化に邁進し得た學院野球部こそ、洵に幸運の波に乗つた我運動部のエースである。

以下、具體的成果の主なるものを記すれば、

第一學期 新入部員として吳港商業出身の藤井、濱田中學より轉校した笹部兩君を始め數名の有力な選手を迎へ、草ヶ谷、山田、宮本、河南、竹谷等の舊選手を主体として早くも昨年度に優る強力陣を編成、一路、秋の峽南再制覇を目指して遺漏なき準備を進めた。

第二學期 愈々待望の秋のシーズン来る！ 部員の張切り方も一通りでない。期待された藤井君の病氣退學は遺憾ではあつたが、チームの戦闘力は日に日に強化されて行くばかりだ。テニスコートとしてさへ充分とはいへない狹隘な校庭でも、適宜の練習方法と熱心とさへあれば超理論的成果を得られることを實證しつゝ、白熱的猛練習が繰り返された。土曜、日曜日には努めて相手求めて小學校々庭、又は身中球場に於て練習試合を行ひ、實戦上の訓練とした。此等の成績については一々記載するの煩を去けるが、何れも鎧袖一觸、王者の威を示して餘す所がなかつた。

◎甲府實業軍の來征

十一月十五日 本學院野球部は身延中學野球部と共同主催の下に、縣下隨一の強豪甲實軍を招待して堂々々と戦ふの機會を得た。同チームは人も知る如く、本年春職業野球の中堅、名古屋金鯨軍が甲府來征の折、稀有の好鬪を爲したことに由り大体

その實力の那邊にあるかは視ひ得るものであつて、正に我軍にとつては絶好の試金石であり、玉碎して悔なき對手である。田邊監督以下未曾有の緊張を以て此の強敵に當る。

午前十一時甲實先攻にて試合開始……於身中球場  
兩軍メンバー次の如し

山	谷部南本谷木原田田	安打數	得点數
草ヶ	笹河宮竹鈴梅増山	祖山三	甲實六
(遊)	(二)	(一)	(捕)
(二)	(一)	(投)	(左)
(一)	(二)	(三)	(中)
(左)	(右)	(三)	(右)
祖	三振數	失策數	
實	祖山四	甲實零	
岡林	澤上賀川	宗田	
林	深井志田	乾	
岡	西桂		
甲	祖山四	盜壘數	
(捕)	甲實五	祖山六	
(遊)			
(一)			
(左)			
(二)			
(三)			
(右)			
(中)			
(投)			

試合開始早々、吾軍宮本投手の制球定まらざると、内野守備の不調とに祟られ三回までに計六点を先取せられ、頗る不利の裡に戦を進めた、後半は宮本の投球漸く本来の快調に立直つて完全に敵の健棒を封じ一の得点を許さず、吾軍こゝを先途と旺んに好打せしも流石に對手は一流チーム、遂に毎回走者を送り乍ら得点の機會を逸して、結局、六對零を以て敗退した。乍然洵に敗れて榮有る善戦と云はねばならぬ。蓋し數年前の學院チームを知る人にして此の試合を觀戦したならば、只々驚嘆の聲あるのみであらう。實に此の一戦こそ、學院野球部史を飾る劃

期的事實として永久に記念さるべきである。試合終了後、甲實軍一行十五名を招いて梅屋旅館に於て晝飯を呈し、終つて本山を案内、禮を厚ふして同軍の勞を謝した。

◎第七回 阪南軟式野球大會

前年度優勝チームの名の下に威風堂々出場。

十一月廿二日午前九時半より身中球場に於て舉行、參加十チーム、開會式劈頭、山田主將より優勝旗を返還して我ナインは第一次戦の先鋒を承つて、先づ東電チームと對戦、快打快走、五回を終つて遂に廿二点を入れ、コールドゲームで大勝、祖山廿二A對東電零、バッテリーは投手竹谷、捕手河南、午後一時より第二次戦を大河内クラブとの間に行ふ、以後の試合への餘力を殘して軽く敵をあしらひ、三A對零にて樂勝、準優勝戦出場の資格を得る。バッテリーは前試合と同じく投手竹谷、捕手河南の兩君、本日の連續二試合を通じて敵に得点を許さなかつた。竹谷投手の奮投と、バックの好守は目覺ましきものがあつた。翌二十三日 正午より準優勝戦、吾軍は俊敏を以て鳴る遠來の青柳A、K、Cと對戦、ベストメンバーを以て之れを迎へた。前日休養した正投手宮本君の快腕は自在に敵を奔弄して我軍を泰山の安きに置き、五A對一にて悠々と勝を制し、優勝戦へ進む。

午後三時より優勝戦、祖山學院對身延クラブ。球審甲實の深澤投手、壘審身中小野野球部長、兩軍メンバー



◎以上本年度野球部記事の概要であるが、如斯の快報を齎し得るは總じて部員諸君の忍苦精神に依るは勿論であるが、殊に繁忙なる卒業期を控へて母校愛の一念から多大の困難を排して野球部發展強化の爲めに盡瘁された監督田邊、マネージャー草ヶ谷永瀧、三氏の勞を多とし、本學野球部建設の功勞者として特記し度い。

凡そ、萬事に於て建設は難く、破壊は易い。若い選手諸君よ建設の苦辛を忘れず、先輩の恩誼に叛かず、一意戒心、存菜の方途に萬善を期せよ。

「勝つて兜の緒を締めよ」とは此等先輩の諸君へ贈る唯一の饒だ。そして一般學生諸君よ、殘る彼等を一層理解し、慰り、勵まして下さい。徒らに不健康な批判や、白眼的無關心は、日連の若き弟子（現代を呼吸する）や、明朗なるべき祖山スピリットには絶対に排撃せらるべきものではないか。生きた弘宣流布は、無反省な遊戯雑談に青春を徒費する者や、唯我獨尊的精神懸り人種には縁なきものではないか。改造された新しい色心で永久の青年の宗教を護り輝すことに吾人の努力が強ち無用ではなからう。（以上）

競技部は末に獨立せざるも十一月一日峡南陸上競技大會身中グラウンドに開催せらるや松岡、香川、四條、橋本の四君出場し香川は百米五着、二百米三着に入賞す、同月三日身延小學校運動會に於て身中生學院生四百メートルあり、學院は香川一着、大森二着にて入賞す。來年度は是非競技部たるものを新設した

く痛切に思ふ。

最後に院長現下にをかせられては運動部の春季旅行には種々と御面倒見て下され尙金一封を下され、又各部大會に際しては多大の獎勵金を下されしことを爰に厚く御禮申し上げます。

尙林部長先生並に前年度幹事田邊、草ヶ谷兩大兄の心からなる御指導を感謝致します。（香川記）

### 祖山學院春季修學旅行記

穗坂 穎 淳 記

一、日時 昭和十一年六月二日より六日まで五日間

一、視學旅行地 日光、東京、鎌倉、江ノ島方面

一、引卒者 松木本興先生、武田海正先生

一、參加人員 三十四名（外引卒者二名）

【六月二日】一行は午後六時祖師堂前に集合、宗祖の御前に道中無事の祈念を捧げ、引卒者松木先生からの旅行に對する訓示があつた。そして吾人の視學旅行は唯だ單なる旅行として名勝各地を歴訪するのみのものに非ずして、その一つ／＼がすべて教室に於ける授業の延長であり、且つ現實の生きた學問であることを各自の念頭に置いて……午後八時四十五分柿沼、林兩先生並に三木學兄に見送られ楽しい修學旅行への第一歩の踏み出しとして身延驛を後に甲府盆地の螢火を賞しつゝ甲府驛着、十一時二十五分後中央線にて新宿に向ふ。

【六月三日】午前三時四十八分八王子驛に着するや全市了法寺



住職、故岩崎龍雄君の法兄鳥崎龍明師が出迎へ下さつた。五時新宿驛着、柳井、勝部、櫻庭、中川の諸兄出迎へられて直ちに明治神宮参拜、曉の冷氣に神域愈々森嚴なる中に大帝の御仁慈を追憶し國家の隆盛を祈り、立正大學に向ふ、此處にて森、牛居の兩兄出迎、六時半立正大學着。松木先生導師の下に全大學寄宿舎香風寮禮拜堂に於て讀經、やがて寮監片山師より寮生の日常に就いての説明あり、尙同師の案内に依り寮内各室の見學後食堂（甘露室）にて朝食の御馳走に預る。此の時古智研氏の學生會代表としての歡迎の辭及び立正大學としての挨拶があつた。喫茶後禮拜堂前に於て記念撮影す、更に立正大學各研究室、及圖書館等を參觀後同大學を辭し二重橋畔に聖壽無窮國運隆昌を祈りて後小傳馬町身延山別院にて晝食をとり午後十時半まで自由解散、別院にて一泊す。

【六月四日】午前四時起床、五時別院出發、淺草雷門より東武線日光電鐵に身を托し午前八時四十五分東武日光驛着、日光町最勝院横山支秀師、小西旅館等の出迎を受け、小西旅館にて休憩後、電車にて大谷川の清流を左に見て馬返しまで、此處よりケーブルカーにて約八分間、菩提梯より以上に急速な峻嶺を上りつめると明智平、それより更にバスにゆられながらやがて中禪寺湖に到つた。心配してゐた華嚴の瀧も幸に霧が晴れあの雄大な姿をはつきりとあらはしてゐた、それより更に中禪寺湖畔に沿うて中宮祠へと詣でた。中宮祠は日光全山の鎮守と稱せられ二荒神をお祀りしてある。松木先生より記念撮影をして頂き

同湖畔鳶屋旅館にて中食をとり、約二時間或は湖畔を傳ふて立木觀音に行く者あり、或は湖上にボートを浮ぶものあり、一千三百米の山上に初夏の綠風を満喫。

午後二時中禪寺湖出發、徒歩にて途中阿含、方等般若等の瀧を見て小西別館へ歸館、疲れきつた五体を熱い風呂に憩ひ、佛間に於て松木先生導師の下に讀經、館主小西謙造氏の當病平癒を祈り、夕食後三々五々土産品を求めに町へ出る。今日の日光は山も町も行く處通る處悉く學生……また學生で埋れて居る。

【六月五日】午前六時起床、七時半旅館を後に東照宮並に輪王寺参拜、輪王寺は間口十八間、奥行十四間と云ふ相當に古い建物だつた。勝道上人の開祖に依り慈覺大師が中興の祖となり千二百有余年の古き歴史を有し本尊は中央に藥師如來、左右に千手、馬頭の兩觀世音菩薩を安置してゐて俗に三佛堂とも稱せられてゐるとか。本堂の横に鶴龜の池と云ふのがあり其處でも松木先生に記念撮影をして頂いた。それより更に相輪塔の前に到つた、これは叡山の相輪塔に倣つて慈眼大師（天台僧正）の建立に依り塔柱の高きは四丈八尺、副柱一丈七尺、周九尺五寸、塔の上部には傳教大師の願文を鑿してあると云ふ素晴らしく高大なもので國寶となつてゐる。此れより東照宮へ参拜、東照宮入口にて一行記念撮影す。一代の名彫刻師左甚五郎が其の粹をつくした彫刻として有名な陽明門の前にたゞんだ時、吾人は先づ其の洗練された技巧の妙なるに驚異の眼を見はつた。實に日暮の門の別名あるも所以ある哉である。更にねむり猫、これ

はまた有名な割合に何と可愛い彫刻だつたらう、口の悪い先生の曰く「此の猫は一名嗜眠病猫と云ふのだ」と呵へ。東照宮奥社、鈴鳴龍の堂、更に徳川三代將軍家光公を祀つた大猷廟等參觀、二天門前に於て一行記念撮影す。最後に寶物館を拜觀して館に歸り、十時半日光を辭して東京へ。

東照宮輪王寺の建築物は何れも國寶となつて其の技巧の優、莊嚴の美に至つては全く悉く驚かざるはないが、今日の日光は美術の都であり、景勝の地と云ふ丈で、生きた信仰は少しも見られない。午後二時四十八分雷門着上野公園を経て谷中瑞輪寺參拜、更に深川淨心寺參拜後小傳馬町の別院に歸り七時半より別院に於て東京校友會主催の歡迎茶話會に先輩諸賢の心を盡したる歡迎の辭を賜り山の小法師等は只々感激に一時を過した。別院にて一泊。

【六月六日】午前六時別院出發、七時半池上學林師徒一同に迎へられて池上本門寺着、祖師堂、大坊、御眞骨堂等參拜後大廣間に於て休息す。池上學林代表の挨拶があつて、名物くず餅の接待を受く、その説明に曰く「此の餅は映畫撮影監督として有名な池田義信氏の實母が池田屋の屋號の許に營業せるもの」と、記念品を賜り學林生一同に見送られ池上出發、鎌倉へ向ふ。十時二十分鎌倉着、本覺寺參拜後妙本寺に詣づ、比企判官夫妻並に大學三郎夫妻の古墳あり、尙文壇の龍兒として一世にその名を知られた故牧逸馬（長谷川海太郎）氏の新しい墓標が雨中にしよんぼりと立つてゐるのもまたもの寂しく感じた。

續いてばたもち寺として有名な長榮寺、松葉ヶ谷安國論寺、建長五年（皇紀一九一三）日蓮上人安房小湊より來りて小庵を營み筆て法華經の首題を唱へ、後立正安國論を草せし處にして尙宗祖鎌倉に入り給ひしより終身給仕奉公の熊王丸の御堂あり。鶴ヶ岡八幡宮參拜後鍋冠日親上人舊跡、並に宗祖辻説法の御靈跡へ參拜す。折節の雨をかこちつ、本覺寺にて晝食の馳走になり、これより電車にて長谷觀音へ。

本尊は十一面觀世音菩薩、本願は德道上人（開山）、御長三丈三寸（九米十八糎）時代は元正天皇の養老五年、作者は春日佛工稽文會、稽旨勳、開眼は行基菩薩に依るものなりといふ。次に宿屋左工門光則公の靈跡光則寺へ、文永八年九月十二日師の日蓮上人は立正安國の正義を叫ばれたる大忠の故に捕へられて龍口の刑場に曳かれ、弟子の日朗上人も又捕へられ邸後の土牢へつながら給ふ。牢内の弟子を偲ぶ日蓮上人佐渡ヶ島へ流罪の旅に上り給ふ可き前夜相模の依智より特に一書を賜ふ。即ち「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今宵の寒さにつけても牢の中のありさま思ひやられていたはしくこそ候へ」云々、弟子は師の上を案じ、師は弟子の身を憐む温情慈念惻々として人にせまり、讀んで泣かざるものなし、宜なるかな光則同情の念大いにうごき密に日朗上人をして佐渡に上人を省覲せしめしと云ふ、寔にこれ萬年師孝の精魂を留め給ひし法難の史蹟であり今詣で、牢前に立つも自ら襟を正さざるを得ない。更に大佛尊へは篠つく豪雨を冒して參拜した、これより電車にて龍口寺へ

參拜す。宗祖の御開扉を願ひ、親しく御法難の靈跡を拜す。時間の余裕がなかつた爲江ノ島は約三十分自由見物、藤澤驛發午後四時三十五分東海道線にて躰延の途につく、六時四十五分富士着、同驛七時八分發、身延驛着午後八時四十分バスにて山門まで、一行直ちに祖師堂前に到りて讀經、宗祖の御前に視學旅行無事終了せるを奉告し奉つた。引卒者解散の挨拶、視學旅行隊萬歲三唱、九時十五分解散。

最後に立正大、中學よりの深甚なる御厚志、身延別院主任小松海淨尊師及望月日雄、田中海珠兩師、日光最勝院横山玄秀師小西謙造氏、谷中瑞輪寺主深見僧正、在京校友諸賢等の御芳情を感謝し、各諸聖賢の色心御健在を祈念しつゝ、欄筆する。

### ◆文學部

幹事 牛 居 行 信

萬里の山の中に源を發した清水は滔々曠野を流れて、衆人の渴を止め、舟を浮べ、稻を養ひ、而して渺々果しなき大海に入る。

斯の如く、釋尊靈山八ヶ年の修多羅は、正像末の三時と印度支那、日本の三國を通貫し、更に萬代全宇宙法界皆歸妙法への大海へ注入せんとして間斷なし。

あゝ、現今我等が時代と處を異にし、然も猶且つ同法一味の聖教に心行くまで浴し無限の法悅境を自由に遊行し得るは本佛の慈悲廣大なるは勿論、更に之を傳ふる宗教文學の功績の偉大さに、滿腔の敬意を表して宜からう。

凡そ聖賢の大教を垂るゝや、その方法に二種あり、即ち口演

と文筆となり、今一往之を分けるに前者は横に廣く當世の四衆への動的弘通にして、後者は豎に長く未來永劫への靜的流通傳導である、今この二者を釋尊一代化導の上に參照するに、五十年の説法化益は前者にして、八萬法藏の經卷は後者なり、更に宗祖の生涯にこれを求めば、信誘四衆の道俗相手に超然火を吐く鎌倉街頭の折伏逆化は前者に疑らへ、四百余篇の遺墨垂教はまさに後者と言ふべきであらう。

然るに近年、前者の華々しきに對し後者は地味なる故にか、祖山の文學方面は余りにも振はず、遙かに置き忘れられたるかの感あるは如何？

「根深ケレバ枝茂シ、源遠ケレバ流長シ」とは宗祖の聖訓、偉大なる獅子吼は、何時も完全なる宗教文學に根を發し、完全なる宗教文學は永遠に而も偉大なる雄辯を生む。

願くば學院諸兄よ、二者不勝不劣而同體の理を知り、共に專念鍊磨し鬼に金棒、以て益々大法宣布の爲に邁進、宗教家としての本懷を達成し、更に燃ゆるが如きその熱と意氣との魂の叫びをこの文學部を経て永遠に止め置かれん事を。

### 同窓會文學部へ寄贈書籍

- |      |             |
|------|-------------|
| 大崎學報 | 立正大學内宗學研究會殿 |
| 智山學報 | 智山學會殿       |
| 信道人  | 松楓居殿        |
| 求道   | 求道園殿        |

山 柿 會殿  
 や ま 谷 山 柿 會殿  
 國 防 池 田 壽 良殿  
 其他新聞雜誌諸種 各 位殿

同窓會文學部寄附者芳名

金 壹 封	法 主 猊 下
金 五 圓 也	柴 田 執 事 長 殿
金 貳 拾 圓 也	本 學 院 教 師 山 殿
金 拾 五 圓 也	學 院 教 師 課 殿
金 五 圓 也	鈴 木 智 精 殿
金 拾 圓 也	大 阪 校 友 會 殿
金 五 圓 也	田 中 惠 春 殿
金 貳 圓 也	大 澤 惠 宏 殿
金 貳 圓 也	新 岡 義 宏 殿
金 參 圓 也	鈴 木 智 好 殿

「棲神」第廿三號

原稿募集!

切 昭和十二年九月十日迄

◆告!

棲神第廿一號(殘本廿余部)及び第廿二號共に僅少残つて居りますから、御希望の方がありましたら左記へ御申込み下されば實費にて御送り致します。

(因に第廿一號は、本號、岡先生の「身延古抄雜々集に就いての考察」で問題の珍書、身延文庫新發見の聖傳資料「日進聖人仰之趣」を初め清水、遠藤、高田、鹽田等一流諸先生の論文を掲載せるものなり)

「棲神」第廿一號、第廿二號

七十九錢

(共に實費送料共)

祖山學院内 同窓會文學部